

(2017年7月10日講演)

12. 「共和党と宗教保守票—なぜトランプを支持するのか—」

名古屋市立大学人文社会学部 教授 松本佐保委員

では、始めさせていただきます。地政学の勉強会であるが、本日の話は地政学の話が最後になって、アメリカの地図が出てくるが、それ以外はほとんど地政学とは関係のない話になる。これは拙著『熱狂する「神の国」アメリカ』という本で、帯にはローマ教皇はトランプを止められるかとある。この本は昨年まだトランプが選ばれる前に出版したが、今日はこの本に基づいた話をする。

通常大統領は聖書に手を置いて宣誓するというをご存じの方も多いと思うが、トランプはリンカーン大統領が使用した聖書と、それから、彼の母がスコットランド系アメリカ人ということで長老派 **Presbyterian** 一派が使用している聖書を、母親から引き継いだものをこうやって見せている。こちらの持っているほうは多分リンカーンのものだと思う(資料 P2)。ということで、アメリカという国は宗教と政治が実はあまり分離されていないところから入っていきたいと思う。

歴代の大統領の宗教をみると、ケネディはカトリックであるが、彼以外はほとんどすべてがプロテスタントの大統領で、トランプに関して言うと長老派であるが、あとは同じ長老派であればレーガン、今日はレーガンとの比較という話が結構出てくる。それからアイゼンハワーや、ウッド・ロー・ウィルソンなどが有名どころである。それ以外のバプテストだと、クリントン、カーター、トルーマンなどがいる。オバマ氏も、実は黒人系のクリスチャンで、プロテスタント系となっている。(資料 P3)

本日の話は、いわゆる宗教保守・右派というのはどういう人たちで、そしてどうして彼らはトランプを支持しているのか、それが今後継続するのかどうかである。歴代の大統領、特にレーガンとの比較をさせてもらいたいと思う。トランプは多分自分ではひょっとしてレーガンかと思いながら選挙の戦い方をかなりまねしたのではないか。回りは全然違うと言っていたが。

それから、よく言われることであるが、二大政党政治に限界があるということで、今無党派の人たちが宗教ロビーだったり、メガチャーチに組織されているという話、そしてメガチャーチと宗教団体ということで、トランプが実際に彼らの資金力や政治力に目を付けているという話をさせてもらいたいと思う。

この辺は皆さんご存じだと思うが、アメリカの宗教の内訳、プロテスタント **55%**、カトリック **25%**と、そしてユダヤは非常に少ないが組織されている**2%**、モルモン、アーミッシュ、あとはカルト系もアメリカでは結構多い。実際に信仰を持たないと言っている人が

実に 10%ぐらいしかいないということである（資料 P5）。

図にするとこのような感じで、大体プロテスタントが多数派で、カトリックも 25%で 4分の1で、それなりに力を持っていることになる。

プロテスタントの中を見ていくが、プロテスタントには大きく分けて主流派と福音派とがある。もともと主流派のほうが数が多かったが、1970年代終わりぐらいから立場が逆転して、2017年の時点では主流派が 25%、福音派が 35%で、福音派のほうが数が多い（資料 P7）。横に書いてあるのは、カテゴリーが非常に難しいが、いわゆる主流派は米国聖教会であったり、ルター派で、福音派というのはバプティストなりペンテコステ、長老派は割れている部分があるので、必ずしも福音派とは言えない。キリスト教は重要であるかという質問をアメリカ人にすると、60%が重要であると回答する。一方、ドイツやイギリスは非常に低く、イギリス 12%、ドイツに関しては 8%しかキリスト教の重要性を国民が認めていない。そして、キリスト教ではなく宗教はあなたにとって重要かと言うと、実に 80%のアメリカ人が宗教は重要だと言っている。これは欧州よりもいかにアメリカが信仰心があつくて、身近にあるということではないかと思う。

身近だという例え話で、笑い話として聞いておいてもらいたいが、トム・クルーズとニコール・キッドマンはもともと夫婦だったが、トム・クルーズはサイエントロジーで、キッドマンはカトリックということで、実はこの 2人が結婚した理由の一つとしては、トムがサイエントロジーというカルトで、カトリックという一番古いキリスト教徒と結婚すると、彼のカルトに正当性がもたらされるという理由でしたのではないかとまことしやかに言われている。そして、2人が離婚した後、キッドマンは実は敬虔なカトリックであり、敬虔なカトリックは離婚はいけないことになっているから、トムとの婚姻関係は実は中世のような感じで成立していなかったと証明して、たしかカトリックのフォークシンガーと再婚した。中世のような感覚が今のハリウッドスターにもあるというくだらないエピソードだった。

では、本題に入っていく。宗教右派・保守とは？なぜトランプを支持するのか。

昨年の選挙戦、大統領の本選の前後を少し思い出してもらいたいが、いわゆるアメリカンファーストということである。それから、トランプはいろいろな問題発言をしているにもかかわらず、選挙戦については支持率を何とか回復している。特に女性への侮辱的な発言では確かに一部の宗教団体、特に女性が激怒したが、実は後ほど出てくるが、トランプのアドバイザーのカリスマ牧師が徹底的にトランプを擁護する発言をして、彼は危機を切り抜けたと言われている。現在はロシア・ゲート疑惑などの問題を抱えて支持率は落ちているとはいいいながら何とか維持しようと、維持するためにはやはり宗教保守や右派の支持が彼にとっては重要だと、どうも考えているようである。だが、そうはいってもトランプ自身があのような方で、何度も離婚したり、女性問題の話がよく出てくるし、信仰心が厚いとは到底思えないのに、なぜ彼のバックに宗教右派なり保守が付いているのかである。

一般的に言われていることとして、彼を支持している中・下流の白人労働者階級は意外

と敬虔なプロテスタントの信者であったり、一方でカトリックも、今はだいぶ社会上昇しているとはいえ、結構労働組合に白人のカトリック信者、いわゆる中・下層の労働者階級には結構カトリックの保守の人たちがいる。その結果、今回の選挙では 81%の白人の福音派がトランプに投票して、カトリックに関しては 52%で、カトリックもそれほど大きな開きはないとはいえ、多数派がトランプを支持したというデータがある。

この表(資料 P12)、特に一番下の線を引いてあるところで、クリントンとトランプの 2016 年のところを見ると、白人のいわゆる福音派の有権者に関しては実に 81%がトランプで、ヒラリーはたったの 16%だという衝撃的な数字が出ている。カトリックを見ると、カトリック全体の平均としては 52%がトランプ、ヒラリー45%であるが、ヒスパニックを入れると当然ながら逆転する。ヒスパニックを見ると、67%がヒラリーで、トランプがたったの 26%で、これは言われていたとおり、やはりヒラリーのほうにヒスパニック票が多かったのだが、これが白人のカトリックになると逆転して、37%がヒラリー、60%がトランプで、結局平均するとカトリック票の 52%がトランプに行ったことが分かる。

トランプ本人は全然信仰心がないというか、どう見ても薄いのだが、それは実はそれほど大きな問題ではなく、側近である、特にペンス、クシュナー、そして更迭されたと言いつついまだに影響力はあると言われているバノン、この 3 人が宗教票を組織したことが非常に大きいと思う。ペンスに関しては、彼はもともとカトリックだが、今の奥様と結婚されるときにボーンアゲインの福音派に改宗をして、今でも非常に敬虔なクリスチャンで、非常に保守的で、例えば同性婚や中絶などに反対という立場をとっている。バノンはカトリックであるが、カトリック保守で、かなり右派的な世界観の思想を持ち、宗教右派から支持を受けていて、トランプが大統領になってからイスラム系の移民の入国を制限するという大統領令を出したりして騒ぎになったが、あれはバノンがやはりキリスト教なり、カトリック右派として、キリスト教こそ優越的な宗教であり、イスラムを排除するべしという考え方を持っているし、一方で、イスラム教徒のほうがグローバルで見た場合に発展途上国に多いということで出生率が高く、このまま放っておくとイスラムのほうの人口がふえてしまう。現時点ではグローバルで見てもかろうじてカトリックなりプロテスタントなり、クリスチャンの人口が多いが、あと 10 年、15 年たったらイスラム教徒のほうの数が多くなると言われている。それがアメリカという国の中でも起きるのではないかという危機感、脅威、だからこそ本来宗教は人種と関係ないはずだが、バノンの世界観では、キリスト教は白人の宗教で、それをイスラムから守るのだという考え方が出てきている。クシュナーはご存じのように正統派のユダヤ教徒で、ユダヤ・ロビーはもちろんであるが、実はキリスト教シオニストである。イスラエルを非常に強く支持するのは、実はユダヤ系の人だけではなく、キリスト教右派なり、保守のグループで、キリスト教シオニストという人たちであるが、彼らがイスラエルを非常に強く支持しているし、関心のある方は、私の書いた本に、実はキリスト教シオニズムについて 1 章分を割いて、第 6 章で説明しているの、もし後で質問があったら詳しく述べさせてもらいたいと思う。

宗教票をどうやって集めたのかであるが、レーガン大統領の 1980 年選挙も宗教票を非常にたくさん集めた。レーガンが勝ったときのライバルはカーターだったが、カーター自身はもともと南部出身で、バプティスト。本当に牧師の資格を持っていたかという点、そうではないという方が多い。だが、若いころに牧師の代理のようなことをやっていたのは事実で、かなり敬虔なバプティストの南部の信者であったカーターに、トランプに比べるとかわいいが、当時離婚歴があったレーガンがどうやって基督教の票を集めることに成功したのか、今回トランプはレーガンの 1980 年選挙を参考にしたということである。

プロテスタント主流派と福音派の考え方であるが、主流派は実は結構リベラルで、例えばヒラリーなどもそうであるが、福音派のほうがやはり原理主義的な傾向があり、いわゆる右派的で、アメリカこそ神の国であるといういわゆるアメリカ第一、アメリカファーストという考え方は、そういうところから来ていることが考えられる。これは先ほど言ったが、数的に主流派のほうが数が多かったのが、ちょうどレーガンが選ばれるころに逆転して福音派のほうが多数派になっていくということである。だから、福音派が多数派になったころから、その福音派が共和党の票田になっていったと言われている。

トランプを支持する宗教ロビー、歴代の大統領との比較ということで、特にレーガンから選挙戦のノウハウをトランプが学んだこともあり、レーガンと比較しながら、この第 2 章では話をしたいと思う。

いつからプロテスタント福音派が票田に？ということ、1980 年のレーガン大統領選挙がかなり重要だったということである。このときは基督教徒の市場開拓のために選挙委員会が実際に結成されて、牧師の経験もあったカーターを出し抜いてレーガンが勝利するためにはどうやって基督教票を横取りするのかということを実行した。その時にカリスマ伝道師やテレビ宣教師などをたくさん採用し、そしてちょうど時代は、いわゆるバイブル・ベルトが台頭してくる時代にもなる。さらに、これはもう少し後の時代であるが、いわゆる北部の工業が衰退して南部に一部航空産業とか武器産業が移って行って、農業中心だった南部がだんだん経済的にも豊かになって、雇用も増えて人口も増える時代、これはもう少し後であるが、こういう変化が起きていった。

宗教右派と大統領というと、一番最初に出てくる人はやはりブッシュ・ジュニアだと思うが、いわゆる十字軍発言であったりとか、彼の場合はパット・ロバートソンというカリスマ牧師が付いていたり、カール・ローヴが選挙戦のときに宗教票を集めた。妊娠中絶反対、同性愛反対などが言われていた。オバマ大統領でさえ、彼はリベラルなプロテスタントであるが、アメリカの政治は、共和党だけではなく民主党でも実は宗教との分離があまりされていないということになる。

レーガン時代に戻るが、レーガンのために基督教保守右派の票を集めるのに最も活躍した人物と言え、このジェリー・ファルウェルである（資料 P18）。モラル・マジョリティを率いて基督教福音派を組織し、共和党のレーガン大統領の選出に多大なる貢献をした。

そして、何と今回トランプ選挙では、彼の息子であるジェリー・ファルウェル Jr.、名前そのままジュニアが付いているだけであるが、彼がかなり大きな働きをしたと言われている。アメリカという国は不思議な国で、共和制で王様とか貴族が大嫌いと言いながら、宗教界では世襲制になっている場合が多く、このジェリー・ファルウェルの場合も息子が、父親が作ったリバティ大学の学長も兼任しており、父親が築いた宗教エンパイアを引き継ぎ、リバティ大学の学長、福音派などの宗教右派保守の共和党への指示を取り付けている。先ほど最初のほうに出てきた、ちょうど本選の前にトランプが女性を侮辱する発言をして宗教心のあつい女性からひんしゆくを買ったときに彼が出てきて何と言ったかという、「いや、人間は皆罪深いのだ」ということで、多分大半の方は、そのように人間と言って一緒にくくってほしくないと思ったと思うが、宗教心がある人は、ジェリー・ファルウェル Jr.がそう言うなら少し我慢しようと思ったのか、そうなのだということでトランプにそのまま入れたのか、その辺は分からないが、やはり彼が擁護したことが功を奏したと言われている。

これはレーガンの時代の資料（資料 P20）で、カリフォルニア州のシミバレーというところにレーガン大統領図書館があり、そこで資料調査をしてきた時の資料である。その1980年選挙のときに、レーガンがいかにクリスチャンとして素晴らしかったか書いてある。隣は、レーガンがカリスマ牧師と手を握って、聖書がすぐ横に置いてあって、“**Make Your Christian Vote Count**”とキリスト教徒に向かってアピールしている。**What Presidential candidate stands firm; Against Taxpayer-Paid Abortions**のように中絶問題等や、**Against Militant Gay Rights**のように同性愛者に対する反対、それから**For prayer in public schools**ということで、今でも論争がされているようなキリスト教をめぐるいろいろな宣伝文句が、これはインターネットの前の時代であるが、こういうパンフレットがたくさん刷られてレーガンの選挙戦に使われた。

実際に私が資料で見たものとしては、「キリスト教徒市場」開拓のための選挙委員会が組織されていて、政治部門なり教育部門、テレビやラジオでの出演、それからカリスマ牧師や、あとはカトリックの聖職者も、プロテスタントの牧師に関しては17万5,000人、カトリック聖職者についても5万人が動員されたということで、かなり大々的に宗教ロビーを動員したことが分かる。

また時代が2017年に戻って、このような感じで今度はジェリー・ファルウェル Jr.とトランプが握手をしている写真になる（資料 P22）。

アメリカは二大政党政治であるが、近年政党政治に対する不信感で無党派層が非常に増えていると言われている。そういう無党派層を宗教ロビーやメガチャーチなどがだいたい組織しているのではないか、それをトランプがうまく利用したのではないかというところを見ていく。

政党政治への不信感から無党派層が増えている、最近ほとんど報道されないが、ティーパーティーの存在は、トランプの支持にとっては結構重要だと考えている。ティーパーテ

イーの 70%がいわゆる宗教右派で保守だと言われていて、運動が衰退した後も宗教右派や保守の運動は継続していて、そういう人たちがトランプを支持している。カトリックに関しては非常に浮動票的な特徴があり、カトリックに関して詳しく言うと、カトリックは今保守とリベラルに真っ二つに分かれている。もともとケネディが選出されるころ、あるいはその後しばらくは民主党側、カトリックは例えば 19 世紀、20 世紀初頭まで差別をされていたので、マイノリティーということで民主党支持が多かったが、ケネディの後だんだん保守化するカトリックが増えていって、今ではカトリック保守とカトリックリベラルが非常に両極端に割れている状態になっている。そして、無党派が増えていくという話に戻るが、教会は無党派をどうやって組織しているかという、マーケティングリサーチ会社などと協力していて、これがメガチャーチの台頭と関係あるのではないか。メガチャーチというのは、実は非常に入念なマーケティングリサーチを行って、大体郊外とかにあるが、そこに住んでいる人たちの趣向、例えばどのようなテレビを見ているとか、どういう映画が好きだとか、どのような本を読んでいるとか、そういうのを徹底的にリサーチした上で、メガチャーチがそういうものを提供するということが行われている。

ティーパーティーがもともと掲げていた政策を見てみると、実は今トランプがやっていることとかなり重なってくる。上に書いてあるのが宗教と関係ない項目で、下に書いてあるのが宗教と関係がある項目となる（資料 P25）。したがって、TPP や地球温暖化対策には反対。一方で、宗教的なものだと、死刑を存続させるとか、あとはこの後少し詳しく話すが、保険である。国民全員保険に入ることに反対しており、オバマケアを廃止する方向にトランプが持っていったことと関わってくる。あとイスラエルを支持するとか、同性愛に反対とか、そういう関係も入っている。

メガチャーチであるが、トランプが最終候補に残る前に残っていたテッド・クルーズがもともとティーパーティーからの支持を得ていた。彼の場合は、ティーパーティーの中で 70%いる宗教右派からの支持があったということで、これもテッド・クルーズがメガチャーチでスピーチしている写真であるが（資料 P26）、彼はもともと先ほど出てきた選挙公約、特に宗教的な部分を、例えばメガチャーチに行き行って強調したりしていたわけである。だが、テッド・クルーズが候補から脱落した後、トランプが、そのテッド・クルーズが掲げていたような政策を、そっくりそのままとは言わないまでも、かなりの部分引き継いで、それと同時に票も引き継いだのではないかとということになる。

カトリックであるが、カトリックは先ほど少し言ったがケネディの時代は民主党支持が多かったが、だんだん保守とリベラルに分かれていって、今は選挙によってはどちらにでも投票する無党派というのか、**Swing Voters** の一つと言われている。60 年より前は、カトリックは差別されていたこともあって民主党だったが、その後は非常に保守化していく人たちが出てくる。ブッシュ・ジュニアの時代を見ると、この表のカトリックのケリー、ブッシュのところを見るとカトリックリベラルのケリーは 47%で、ブッシュが 52%。つまりカトリック信者であるケリーが集めたカトリック票が 47%で、ブッシュのほうがたくさん

集めたというデータになる（資料 P12）。ヒスパニックになるとケリーのほうが多いが、白人のカトリックを見ると、ケリーが 43%、ブッシュのほうが 56%で、トランプのケースと似たような感じのカトリックの投票行動となる。

ということで、実はオバマの選挙のときも、カトリックが多く投票したほうが勝利するというので、オバマが大統領になった時代は、カトリック票はオバマのほうに多く入れているという分析がされているので、少し大げさな言い方かもしれないが、カトリック票を制する者が大統領になるというのが、ここブッシュ・ジュニア以降の大統領選挙の特徴と言えるかと思う。私だけが言っているわけではなく、専門家の方も言っているかと思う。

アメリカを代表するカトリックと言えばケネディ夫妻である。ジャクリーン・ケネディが 1963 年に当時のローマ法王ヨハネ 23 世と会見したときの写真(資料 P29)。そして、これがつい最近、2017 年の 4 月の終わりぐらいか 5 月にトランプ夫妻がフランシスコ教皇と会見したときの写真である。この会見に関しては、私は、読売新聞に記事を書いたがなぜトランプ夫人が黒い服を着ているのかとか、教皇は怒ってむっつりした顔をしていて、まるで葬式のようなのだとか、雑誌レベルでそういうコメントがあったが、女性が黒い服を着るのは実はジャクリーン・ケネディもやっけていて、カトリック信者の女性がローマ法王に会うときの正装であるというようなエピソードも書いた。ちなみにトランプの奥さんはカトリック信者だそうである。トランプ自身は長老派だがメラニア夫人はカトリック信者なので、こういう格好をしているというエピソードである。

アメリカという国はイギリスから独立したという経緯があるが、ピューリタンの人たちがアメリカに渡ってアメリカを作ったが、イギリスが君主制に対して、共和制であること、そしてアメリカ合衆国に来て、荒地で何もなかったところに世界一繁栄する国家を作った、それはピューリタンである自分たちがやったのであり、信仰によって支えられた。そして神がこの国を祝福している、だからこそアメリカは神の国であるという考え方が、どうも 21 世紀になっても、アメリカ人の特に白人の人たちには強くあるのではないか。

ということで、カトリックというのは、ヒエラルキーと言って、大司教、枢機卿がいて、司教がいて、一般の聖職者がいて、一般信徒があるというがっちりとした組織があるが、プロテスタントはそうではなく横並びであるということで、万人司祭で誰でも牧師になれる。例えばカリスマ牧師なども、ある日突然神様が降りてきて、ボーンアゲインになることで誰でもなれるという意味で、アメリカという横並びの、階級制度を否定する国に非常にふさわしいと考えているわけである。

あともう一つ重要な点としては、プロテスタントは聖書中心主義で、これは結果的に信者たちの識字率が非常に高いということにつながった。いわゆる『プロテスタントの倫理と資本主義の精神』で言われることでもあるが、実はカトリックというのは 19 世紀まで、信者が自分で聖書を直接読むことを許されていなかった。聖職者が聖書を読み聞かせて、あるいは自分の解釈で信者に説教する。プロテスタントは信者が直接聖書を読むので識字率が非常に高い。カトリックは識字率が低いゆえに、それが経済発展の格差につながって

いったということになる。

日本が明治維新以降なぜ経済発展したかというのは、寺子屋があったから、日本は江戸時代から識字率が高かったので経済発展したという例えを入れてみた。

さらにもう一つ重要なのは、キリスト教の考え方で、プロテスタントの場合、労働によって金をたくさん稼ぐことは、神への奉仕で罪ではない。どんどん稼ぐことこそ素晴らしいことであり、キリスト教者としてふさわしいのだという考え方が非常に強くあるということである。だから、プロテスタント教会、特にメガチャーチなどにはたくさんの金が集まってくることになる。

メガチャーチと宗教団体、トランプが目を付けたその政治力と資金力を見ていきたいと思う。

メガチャーチは、過去 20 年間に 4 倍にふえてきた。現在は実に 1,300 以上が存在して、上位 50 位は平均出席信徒数が週延べ 1 万人で、最大規模のものはテキサスのヒューストンにあるが、これが週 4 万人と言われている。メガチャーチには莫大な収入と人々への影響力があり、実はことしの 2017 年の 2 月にトランプが、ジョソン修正案を廃止するという大統領令を出した。ジョソン修正案というのは、アメリカはきちんと政教分離をすべきだという内容であるが、トランプが、それに反対した。その結果何が可能になったかということ、教会とか宗教団体が集めた金を政治活動に政治資金として寄附することが可能になったということである。ということで、トランプは当然そのメガチャーチが集めた金、あるいは宗教団体が集めた金を自分の政治資金に使ってやろうという思惑で、この大統領令を出したということになる。

このメガチャーチが、ここ 10 年ぐらいの間に非常に急成長しているというデータになる(資料 P35)。

資料 P36 の写真は、私がフィールドワークしてきたカリフォルニア州のアナハイムというディズニelandがあることで有名なところであるが、全部鏡張りのクリスタル大聖堂と呼ばれている教会である。この教会はいろいろなエピソードがあり、もともと福音派のメガチャーチで、非常に金を掛けて造ったのだが、メガチャーチはうまくいくと多くの人に来て、非常にたくさんの金が集まる。このケースはカリスマ牧師がいて成功したが、その娘が跡を継いだのだが、その娘には父親ほどのカリスマ性がなく、信者数がどんどん減ってしまって、結局借金が払えなくなってカトリックに売って、今はカトリックの教会になっているという面白い例である。

もう一つ、資料 P37 は同じカリフォルニアで、全米では第 7 位の規模を誇るサドルバック・メガチャーチと言う大きなメガチャーチである。私は実際に行って取材をしてきた。

カトリックになっているほうのミサも見てきたが、私は信者ではないがカトリックで教育を受けているので、信者の方がいたら失礼であるが、カトリックは実際の型が決まっていて多少退屈である。バラエティーがない。ところが、メガチャーチはもう何でもありであるという話がここから出てくる。

資料 P38 は、プロテスタントのメガチャーチである。まるでロックコンサート会場のようなチャペルも中にはある。私はバブル世代であるので、大学生のころにはロックコンサートで武道館とかによく通った口であるが、本当に武道館のような内部という言い方が多分ふさわしいと思う。

いきなりオープニングがこのような感じで（資料 P39）、ロックコンサートが始まる。これは礼拝のオープニングで、スクリーンにテロップが出て、テロップを見ると、全部神が天から降りてくるとか、神はあなたを救いにやってくるとかいう歌詞であるが、その歌詞が聞き取れなければ単なるロックコンサートというオープニングになる。

非常に工夫されていて、女性と男性がいて、男性は少し若い感じのイケメンの方がいて、女性は多分 30 代ぐらいの上品で結構きれいな女性が対になって出てきて、これは恐らく若い人にもアピールするが、もう少し年上の人たちにもアピールする。しかも、両方とも非常に外見が良いので、引き込まれる仕掛けができていのかなど思いながら見ていた。

大きな礼拝が終わった後、小さいグループに分かれて、皆でゴスペルを歌ったり、ここはカリフォルニア州の南のほうであるのでヒスパニックの方も結構いて、例えばスペイン語で皆が集うテントもあった。

外見はまるでリゾートホテルのような休息スペースがあり、おいしいハンバーガーや、薫り高いコーヒーであったり、初めて来た人には手厚いサービスである。私は初めて来て、興味があるようなふりをして潜入してきたので、ハンバーガーやコーヒーや聖書のただ券をもらった。スタバのような感じで、非常にマーケティングリサーチがされているなど感じた。

このカリスマ牧師はリック・ウォーレンという人で、実は彼は日本でもそこそ知名度があるようで、日本語訳も結構出ている。『人生を導く 5 つの目的』は全米で 1,500 万部売れた大ベストセラーであり、彼はもともとビリー・グラハムという、もう少し年上のニクソンぐらいの時代から活動しているカリスマ牧師の弟子として、その後リーダーシップネットワークという徹底したマーケティングリサーチに基づいてこの教会をメガチャーチに成長させた人物である。リック・ウォーレンは、政治的にはリベラル派とも右派とも交流を持つという非常に珍しいケースになる（資料 P43）。

メガチャーチがどういう役割を果たしているかであるが、アメリカは福祉国家ではないということで、ある意味福祉を担っていると感じた。郊外の新興住宅地に皆が集まって交流する場を提供し、保険に関しては、保険の入り方や生活面でのいろいろな面倒を見てくれる。あと例えばメンタルな病気とか、麻薬やアルコールの問題にも対処してくれる。富裕層にとっては、教会への寄付において税に関して非常に優遇措置が行われている。さらに、エンターテインメントを提供している。

このメガチャーチのマーケティングリサーチのノウハウを生み出した人物でボブ・ブッフフォードという人がいる。彼は 84 年に Leadership Network というシンクタンクという NPO のようなものをつくった。もともとボブ・ブッフフォードはケーブルテレビを幅広くや

っていた人である。カナダとアメリカを合わせて 35 万の教会があるのだが、その中でたくさんの方が来るのはたった一握りなので、小さい教会をメガチャーチに拡大・成長させるにはどうしたらよいかというノウハウを説いた人である。そのノウハウというのは、入念なマーケティングリサーチ、そしてこの辺は少し眉唾であるが、ドラッグーなどに影響を受けて経営戦略などいろいろヘッドノウハウを作った。今でも **Leadership Network** というサイトがあり、そこにアクセスすると、ことしは来る信者数が減っているからどうしようかという牧師がアクセスしていたりする。どうやったら信者の数が増やせるかの参考にしているというサイト運営しているということである。

トランプ大統領が就任式を行ったときに参列した 6 人の聖職者がいる (資料 P46)。先ほど出てきたジェリー・ファルウェル Jr. は実はこの中には入ってなくて、福音派では、これもまた二代目であるが、ビリー・グラハムの息子のフランクリン・グラハムがトランプの就任式に参列した。それ以外には、女性のテレビ伝道師であるポーラ・ホワイト、そしてヒスパニック系のペンテコステ、福音派系の牧師であるロドリゲス牧師や、黒人プロテスタントの主流派であるがジャクソン牧師、そしてカトリックはカトリック保守のニューヨーク大司教のドーラン枢機卿、そしてユダヤ教のラビ。

資料 P47 の写真は派手で、どう見ても聖職者に見えない。一応ドーラン枢機卿だけは枢機卿の赤い服を着ているので聖職者っぽいが、それでも非常に派手な感じだと思う。

ビリー・グラハムの息子であるフランクリン・グラハムがトランプの横で就任式のときに聖書を読んだりしているシーンが写っている (資料 P48)。

ビリー・グラハムは有名であるから多分皆さんご存じだと思うが、どういう人だったかという、彼は、マーケティングなどが出てくる前の本当に霊的なリーダーで、先駆的なカリスマ牧師である。彼を非常に頼りにしていた大統領はニクソンである。今でも 98 歳でご存命である。だから、ニクソンから今のトランプに至るまで、歴代の特に共和党の大統領からは絶大な信頼を得ている人である。どういうことをうたっているのかというと、非常にシンプルで、ボーンアゲイン的な、キリストは私たちの身代わりに亡くなったのだからというようなことを言っている。このビリー・グラハムという人は、今までのテレビとかラジオを含めて、彼の説教を聞いた人は実に 20 億人にも上る。2002 年の時点であるから、今はもっと多い。いわゆるビリー・グラハム帝国を作って、それを引き継いだ息子がトランプの支持者である。

この息子のフランクリン・グラハムであるが、トランプを支持していて、実際に選挙前に彼は何をやったかという、50 の州を訪問してトランプへの投票を呼び掛けた。トランプがニューヨークに 900 人の福音派の牧師とカトリックの保守の神父を集めて彼への支持を呼び掛けたときに、彼の自らのスピーチの前にフランクリンを登場させて、そして彼に、ヒラリーよりトランプが良いのだと、もちろん、トランプは完璧な人ではないことは私も分かっていると、**He is not perfect but better than Hillary.** ということで、キリスト教信者にふさわしいリーダーなのだという挨拶をし、その内容が、その後雑誌の **The Christian**

Post に掲載されて配信された。要はヒラリーがプロ・チョイスであったり、同性婚に賛同であるということに糾弾するだけで、ある意味トランプが支持を得るには十分で、彼が多少ネガティブなことをしても支持はそれで継続されるということだったのではないか。

資料 P51 は、今最も人気のあるテレビ伝道師、2 人ともどう考えても伝道師に見えないが、左がジョエル・オースティンという人で、アメリカで最も大きいメガチャーチ、先ほど言ったテキサス州のヒューストンにあるが、そのカリスマ牧師である。ホワイト氏は、先ほど出てきたトランプの就任式に参列した 6 人のうちの 1 人の女性のテレビ伝道師である。この 2 人は非常に人気があるようである。

メガチャーチとオバマケア廃止との関係で、ことしの 5 月 5 日にオバマケア、いわゆる医療保険制度改革法の廃止が僅差で下院は通過した。上院はなかなか通過しないようであるが、現時点では夏までには成立させると言っている。どうなるか分からないが、今採決をやりようと思ったら、多分通らないということで上院に関しては先送りになった。メガチャーチや宗教団体が医療保険の肩代わりをして、実際にメガチャーチで保険に団体加入することが可能であれば、こうした国家による保険制度は必要ではない。メガチャーチに来ている人たちはそう考えるということである。富裕層はもちろん自分が所属しているメガチャーチに寄付をする。それは税制で優遇がされている。彼らの考え方というか、思想と言ってよいか分からないが、チャリティーやボランティアなどは、自分がしたいからやるべきものであり、徴税という国なり公的な機関から無理やり税金を徴収されるのはまっぴらごめんだという考え方がどうも彼らには強いのではないか。したがって、やはり自発的であり、ボランティア的であり、そして自助的であることを、メガチャーチなどに通っているクリスチャンたち、キリスト教徒福音派の人たちは考えているということで、オバマケア廃止に対して非常にそれを歓迎する立場だということが考えられる。

これは（資料 P53）福音派ではなく、もともとカトリックの宗教団体でコロンブス騎士団と言う、何か「ダビンチコード」に出てきそうな名前であるが、れっきとしたカトリックの相互扶助団体であり、実は私の本にどういう団体かという話が詳しく載っているので、関心がある方はこちらの本を見ていただきたいが、コロンブス騎士団というのは 19 世紀からあるカトリック同士の相互扶助組織であり、当時カトリックは非常に差別されていて立場が弱かった。例えば病気になったりけがをしても医療費が高かったが、この相互扶助団体をカトリックの神父が作り、そして、彼らがこれに加入することで貧しい人も病院に行くことができた。

21 世紀になって、コロンブス騎士団が保険会社を設立して、2008 年～2012 年までのデータしかないが、資料 P54 のように非常に着実に保険契約数・保険の契約額を増大させている。単位が billion であるから、その金額は無視できない。これはカトリックであるので 25% の少数派で皆ではないが、メガチャーチについては多分もっと大きい金額の金が動いていることが考えられる。

最後になるが、資料 P55 がメガチャーチの分布の地図である。いわゆるトランプがかな

り票を取ったバイブル・ベルトのところにメガチャーチが結構あるのだが、それ以外の先ほど私が実際に取材してきたカリフォルニア州にもメガチャーチは非常にたくさんある。それから、トップを誇るテキサスである。バイブル・ベルトは、実は厳密な意味ではテキサスは入らないということでここは塗られていないが、この資料を見てもらうと、メガチャーチの集中度が非常に高いのが分かると思う。

資料 P56 はトランプが勝った州である。このように赤く塗られていて、そっくりそのままかぶるわけではないが、バイブル・ベルトは取っているシラスト・ベルトも取っているし、そして今言ったテキサスもとった。ただ、カリフォルニアに関してはヒラリーが僅差で取ったので入っていないが、この地図とメガチャーチの地図はかなり重なる部分があるということで、地政学とは言えないが、アメリカの地図上では、メガチャーチのマップとトランプが選挙で勝った州はある程度のオーバーラップが見られるのではないかとということである。

まとめになるが、トランプが勝利した州はラスト・ベルトとバイブル・ベルト、一部のサン・ベルト、テキサス州、メガチャーチの地図とかなり重なるのではないかと。トランプの勝利と支持は宗教右派・保守の票でかなり説明できる。そして実際のトランプの今の政策であったジョンソン修正案の廃止であったり、オバマケアの廃止、あるいはイスラム教徒の入国禁止などの大統領令などの具体的なトランプの政策と、宗教右派や保守が望んでいることとはかなりオーバーラップするのではないかと。

今回あまり話せなかったのだが、メガチャーチに来る層は、実は若い人が結構いて、ミレニウム世代は宗教心が低下しているので、一時、ブッシュの後の 2 期のオバマの間に、要するに宗教票とか宗教右派とか宗教保守にはもう政治的な影響力がなくなったのだと言われた。だが、実は若い人たちがメガチャーチに通っている人が結構多いということも考えると、実はこれから後の 21 世紀になっても宗教票が大統領選挙とか政治に、場合によっては政策に影響力を与え続け得る可能性があるのではないかと。以上で私の報告は終わらせてもらう。